

全7回 1日5分読んで考える

「実は語られない．．．呑竜仲店の価値」

この資料は、呑竜仲店「ヤギカフェ」店主の田村が同商店街公式Facebook ページに寄稿した文章をまとめたものです。投稿期間は2014年10月30日から12月4日であり、表記されたウェブページなどのリンクが失われている可能性があります。また再編に当たり一部表現の変更や加筆があります。

呑竜仲店 Facebook ページ : <https://www.facebook.com/donryu.market>
ヤギカフェ・ホームページ : www.yagicafe.com

目次

序文	．．． 3
第1回（11月1日投稿）土橋商店（福岡県八女市本町）	．．． 4
第2回（11月4日投稿）大黒市場と恵美須市場（長崎県長崎市恵美須町）	．．． 5
第3回（11月6日投稿）野毛町地区（神奈川県横浜市中区）	．．． 6
第4回（11月11日投稿）新宿ゴールデン街（東京都新宿区歌舞伎町）	．．． 7
第5回（11月21日投稿）ションベン横丁（大阪府大阪市淀川区十三本町）	．．． 8
第6回（11月27日投稿）浜マーケット（神奈川県横浜市磯子区久木町）	．．． 9
最終回（12月4日投稿）	．．． 10

序文

ここ数年、インターネットによる情報収集が身近になったことと新規店舗がメディアに取り上げられる機会が増えた事などにより、飲み屋街には疎遠でありそうな方々に対する呑竜仲店の知名度が上がったように思います。お客様にならぬとも通りを歩いて見学したり写真撮影をする方、街並みを研究対象とする学生や先生方が見学に訪れる事が増えました。前橋に何十年も居て初めて呑竜を訪れたという人々に会う機会も多くなりました。

このような方々の殆どは、呑竜に対し「すごい！」「良い！」「こんな良いところあったんだ～」
「こういう街並みは残すべきだ」と肯定的に捉えてくれます。しかし、何が「良くて」「すごくて」「残すべきなのか」を詳しく語る方は滅多にいません。

実を言うと、古くから営業する店主や常連客の方々でも、「呑竜仲店は雰囲気のある場所だ！」と感じてはいるものの、本当の価値をどこに見出しているのかを示せる人は稀です。

今回の投稿では、いち店主として「呑竜仲店の価値とは何か」を掘り下げてみたいと思います。

以前、商店街に関して否定的な内容が多く含む文章を寄稿したこともありましたが、今度は先の呑竜仲店のあり方を考えられる前向きなものにしていきたいと考えます。

全国に存在する呑竜仲店と同じ生い立ちの商店街を6つ選び、その歩みを紹介しつつ「呑竜の価値」を明らかにできたらと思います。

11月1日より不定期に投稿をします。全7回、気に留めて閲覧して頂ければ幸いです。

第1回（11月1日投稿）

土橋商店（福岡県八女市本町）

呑竜仲店と同様に戦後特有の事情で神社や寺の所有地が商店街に転用されるケースは多かったようです。

福岡県八女市の土橋商店もその1つです。

呑竜マーケットは大蓮寺の墓地跡を利用しましたが、土橋マーケットは神社の境内と商店街が一体化したユニークな発展を遂げました。

戦後間もないころ 八女市（当時の福島町）の中心街であった土橋八幡宮周辺には闇市露店が多く立ち並び人が溢れ収拾がつかないほどの状況だったようです。 それを見かねた当時の県議であり福島劇場という映画館のオーナーが土橋八幡宮に頼んで境内を商店街化させたのが起源だそうです。 当時は、呑竜仲店同様、旧 福島町出身の引揚者が店主として店を開くことができたそうです。 日販品の商店街から昭和 30～40 年代に飲み屋街に変貌したところなども呑竜と非常に似ています。

戦災復興が遂げられ高度成長期に入っていくと、経済成長を求め手狭な場所から移転する店も多くなります。 また、貸手の神社やお寺も所有地の転用はあくまで戦災支援の一時的な措置という認識がある為、敷地に創られたマーケットは時代と共に激減して行きます。

しかし、土橋商店は、現在も当時の姿を残しながら店舗営業も継続しています。 こちらの商店街も存続と新たな発展に錯誤中のようにですが、地域団体などがイベントを企画したり空間の面白さに目を付けた若者の流入も少しずつ始まっており新たな変化が起こりつつあるようです。

時代が過ぎてしまったが故に今となっては「異空間」としての魅力を持ち始めた神社仏閣地所の商店街。 時間が経てば経つほど、立地による「アジール（聖域＝地域の拠り所）」化の可能性を呑竜仲店も土橋商店も秘めているのではないのでしょうか。

【参考サイト】

土橋商店で定期的に行われるイベントページ

<https://www.facebook.com/dobashizihen/timeline>

若手店舗「ウメの雑貨店」のFB ページ

<https://www.facebook.com/pages/ウメノ雑貨店/194008597405778>

第2回（11月4日投稿）

大黒市場と恵美須市場（長崎県長崎市恵美須町）

戦後の混乱期の1954（昭和29）年ごろ長崎駅一帯にできた闇市や違法建築物が復興の妨げになっていたことから、地域と行政が協力して代替地を同場所に用意。岩原川の下水路にコンクリートのふたを作り、その上に市場と住宅が作られました。

火災前の呑竜マーケットのような商店街が、時代と共に増築・改築が繰り返され原型が分からなくなるほどの変貌を遂げました。そして、良くも悪くも市民を圧倒し街の記憶に刻まれる場所となったようです。

開設から50年以上が経過し、鉄筋の腐食やコンクリートのはく離などでふたの老朽化。商店街の崩落の危険などがあり安全性が保てないことから、長崎市がふたの撤去を決定。2012年3月に閉店・解体され、かつてのマーケットはもとの下水路に戻りました。

もし呑竜マーケットが火事に遭わなかったら．．．果たして建物が現在まで存続することはできたのでしょうか？戦後のマーケットから生まれた商店街は、どんなに人々の街の記憶に刻まれたとしても構造物として歴史的・芸術的価値は認められないでしょう。老朽化や地域への安全性の問題が取り沙汰されれば、あっけなく無くなります。

呑竜仲店は、一度焼け落ち、（安全面・構造面で改善され）リニューアルした非常に稀有な戦後マーケットを発端とする長屋式商店街です。この再建した部分に呑竜仲店の独自性と価値を見出しても良いのではないのでしょうか。

【参考サイト】

かつての姿を記録してある個人ブログ

<http://allxa.blog114.fc2.com/blog-entry-85.html>

第3回（11月6日投稿）

野毛町地区（神奈川県横浜市中区）

震災、戦災から大繁華街に変貌遂げた地区。チェーン店ではない個性的な飲食店が約500店もあります。2000年代には最寄りの電車が廃線となり客足に大打撃を受けましたが、その逆境が若者流入を生み、更なる新陳代謝と街に大きな活力を創りだしました。

車文化が浸透している群馬県では、多くの人々が車に便利な郊外の大型施設店舗へ流れて行く傾向にあります。この為、歩くことを前提とした呑竜界限・前橋中心商店街と呼ばれるエリアの空洞化は、野毛地区が廃線に伴い衰退した時の状態と似ている部分があるのではないのでしょうか。実際、衰微し競合の低くなった呑竜界限・前橋中心商店街にも自由を求め、新しいコミュニティーを根付かせる機会を見出す若者が流入しつつあります。

呑竜仲店に関して言えば、大幅な低額家賃にせざるを得ない現状が、独立心は強くも資金力に乏しい若者を大いに魅了する価値となっているはずです。人を歩かせるだけの「ハコ」は十二分に揃っています。見方次第、アイデア次第で呑竜界限は自分の理想とする生活環境を自らの手で作り出せるチャンスに溢れています。

【参考サイト】

日経トレンドの記事

<http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/column/20131009/1052819/?ST=life>

野毛の歴史が分かるサイト

http://hamarepo.com/story.php?page_no=0&story_id=3029

第4回（11月11日投稿）

新宿ゴールデン街（東京都新宿区歌舞伎町）

言わずと知れた、戦後のマーケットから生まれた有名飲食店街。当時より変わらない木造長屋建ての店舗が狭い路地をはさんで約300件マッチ箱のように並んでいます。今では、「ディープな東京」の観点から外国人旅行者も足を運ぶ観光スポットです。映画・演劇関係者や作家、ジャーナリストなど多くの著名人が集まる街としても知られています。

ゴールデン街は新宿区役所の向かいという超一等地に位置していることもあり、過去に何度となく移転問題が取り沙汰されています。2020年に開催される東京オリンピックに備えた区画整理事業がゴールデン街の存続を脅かすのではないかと心配する声もあるようです。

旅行者を魅了する「ディープな．．．」部分とは、その土地に根付く濃い人間性の事だと思います。見知らぬ地域の日常のさらに深くにある生活．．．いわゆるサブカルチャー（副次文化）的要素を垣間見たいがためにゴールデン街に足を運ぶのでしょう。

呑竜やゴールデン街にある一店舗に与えられた敷地はわずか数坪です。「この出来ない事が多すぎる店内」では、アイデアと個性を最大の「売り」にしなければ成り立ちません。店主の持つ副次文化的要素を大いに反映させ需要（お客様）を獲得するしか生き残れません。よって、このような極小店舗は、店主以外に代替えがきかない「お店＝店主」として存在し、そこを生業処と決めた人間性をより直接的に感じられる空間になるのです。

呑竜仲店のもう一つの価値．．．それは、「副次文化的要素の集合体である」という事です。長屋式の共同店舗施設には、趣味趣向の異なる店主が個性をむき出しにしてお店を連ねています。映画や読書などと同じように自分以外の人間性の中に飛び込むことは、生きる上での娯楽であり大きな活力となります。呑竜はそんな体験を一か所で複数味わえる一大娯楽施設となり得る場所です。

【参考サイト】

商店街公式ホームページ

<http://www.goldengai.net/>

第5回（11月21日投稿）

ションベン横丁（大阪府大阪市淀川区十三本町）

大阪市淀川区の阪急電鉄・阪急十三駅西口に隣接する飲食店街。正式名称は十三トミータウン。

昭和20年6月7日の大空襲により十三駅前是一片焼け野原になりました。戦後、闇市や飲食店が多く集まるようになり、当時は十三駅西口付近にトイレがなかったことにより通称「ションベン横丁」と呼ばれるようになりました。

今年3月に大火災になり現在復興に向けて活動中。かつての呑竜マーケットと同じ状況化から生まれ同じ惨事に遭っている商店街の復興に今の時代背景がどう作用するのが注目されます。

呑竜仲店は1982年の火災後、再建資金の調達に奔走しました。当時の商店街長のメモを見ると呑竜を有限会社にするなどの方法も検討したようですが、結果的に協同組合を設立し建築会社から融資を受ける事により道が開けました。

手段が無い上での選択であり、後に多くの問題をも生み出してしまう結果にもなりましたが．．．僅か十数の店舗で成り立つ料飲業者の協同組合として生まれ変わった呑竜は非常に稀有な組織だと思います。

数が少ない事と反映の速さを強みに、協同組合の指針に則った店主の意思とアイデア次第で独創的で柔軟性に富む商店街を時代に即して作り上げる事が可能です。

裏路地横丁の協同組合．．．これが呑竜の更なる価値の1つです。

【参考サイト】

復興を願う人のブログ

<http://atamatote.blog119.fc2.com/blog-entry-814.html>

火災からの経過を記したブログ

<http://kyo-labo.com/jusohukko/>

商店街FB

<https://www.facebook.com/juso.tommy>

第6回（11月27日投稿）

浜マーケット（神奈川県横浜市磯子区久木町）

戦後まもなくの昭和20年（1945年）の暮れ頃、戦時中に戦車が通れるように作ってそのまま空地になっていた「疎開道路」の一部分に闇市が派生したのが始まりです。当時は10軒程度のマーケットでしたが、現在は、約20店舗、戦後直後の呑竜仲店のような雰囲気を残し「市民の台所」として動いています。過去二度火災に遭うが改修復興されています。これは、市の建築基準法などの位置づけを「浜マーケット」に配慮したものにした経緯があるようで、増改築などが進めやすくなったのが幸いしたようです。

戦後の混迷期に出来たマーケットは、火事などで損壊・焼失すると、立地や建築基準が見合わない事を理由に復活を遂げる事が非常に難しくなるのが現状です。しかし、浜マーケットは2度の惨事も乗り越え生き残り続けています。この存続できるほどの力の源泉は、浜マーケットが市民の後押しを持ち得ているからです。「市民の台所」と自負し歩んできた浜マーケットは、時間の経過と持ち得る歴史的背景とが相まって市民に「残して置きたい場所」と思わせる価値を上げました。浜マーケットは地域のランドマークとなっています。

呑竜仲店も「歴史的背景」や「立地」、「今日までの歩み」を見れば浜マーケットに引けをとらない非常にユニークな存在です。そして何より時間の経過がそれらの要素に価値を蓄積し続けています。呑竜の更なる価値...それは、浜マーケット同様、きちんと商店街として成り立ってさえいれば、「地域のランドマークとして認識される可能性がある」ことです。

呑竜マーケットは1982年の火災後、多くの協賛は得ましたが、実質的には建築基準法や地主との裁判を何とか自力で乗り切り再建しました。今後また同じような事故が起きた場合、事態は当時より困難を極めるでしょう。また、老朽化の一途を辿る呑竜仲店を存続させるには、どこかの時点で何等かの市民（行政）の介入を必要としなくてはならない時もあると思います。おごりではなく、今、呑竜仲店はこの「地域のランドマークになり得る可能性」をもっと自覚する必要があります。そして、いつかの市民の一助を得る時の為に最大限の運営努力をしなければなりません。

【参考サイト】

公式HP

<http://hama-market.com/index.html>

火災からの歩みのニュースを伝える

http://www.kanaloco.jp/article/12261/cms_id/12091

商店街の魅力を取材している記事

http://hamarepo.com/story.php?story_id=2330

最終回（12月4日投稿）

これまで、全国に存在する戦後のマーケットから派生した6つの商店街をご紹介します、「呑竜仲店の価値」を掘り下げてきました。他の商店街との比較で見えてきた呑竜仲店が持ち合わせる6つの価値。それは. . .

- 「立地によるアジール（聖域＝地域の拠り所）化の可能性」
- 「リニューアルした戦後マーケットとう独自性と希少性」
- 「熱意とアイデアのある若者を呼び込める好立地における低額家賃」
- 「副次文化的要素の集合体である事」
- 「協同組合である事」
- 「地域のランドマークになり得る可能性」

. . . です。

これに加え、呑竜仲店の7つ目の価値. . . この土地でなければ生まれなかった無類の価値を提示します。

地域性に富んだ唯一無二の価値。それは. . .

「商店街の創設に郷土の精神が込められている事」

. . . です。

呑竜仲店の呑竜は、上州にゆかりのある浄土宗の高僧「呑龍上人」に由来します。戦後直ぐ希望を失っている前橋の市民に同じ宗派である大蓮寺が商店及び居住 場所を貸し出したのは、呑龍上人の精神があつての事です。これは、呑竜仲店が「ここだけにしか存在し得ない」ことを実感する最大の価値です。呑竜仲店の立地や名前から歴史・風土が滲みでていきます。

【参考サイト】

呑龍上人と「呑竜仲店」名前の由来

<http://www.donryu-market.or.jp/trivia/trivia2.html>